

シンポジスト 岡 知史 上智大学

異文化のインタビューを読む — セルフヘルプグループの日米比較 —

私は難病児親の会を対象として、セルフヘルプグループの組織論的課題を質的インタビューによって研究してきた。しかし、インタビューから何を読み取るかという私の関心は、徐々に変わった。すなわちグループをめぐる客観的事実から、グループリーダーの主観的な(独白的な)語りへ、そしてさらに調査者との問題解決にむけての対話へと関心は移っていった。また昨年、米国内の難病児親の会を対象に米国人研究者と合同で調査を行なったが、米国人による米国人へのインタビューを読むと、主として私が設定した質問項目を用いたにもかかわらず、彼らが米国の文化と思われる一定の枠組のなかで対話していることに気づいた。同時に、私のこれまでの日本のリーダーとのインタビューも、日本文化の枠組内の対話であったと考え始めた。

文化の枠組内の対話では、たとえば、日本では「組織の私物化」と表現された問題は、米国では「会の資金の不正利用」と表現されているのかもしれない。私がかかわった日本のリーダーは「役員の成り手不足」を深刻な問題と考えていたが、一方で米国のリーダーがそう考えていないのは、実態が異なるというより、何を問題とするかという価値観の相違が基底にあるのかもしれない。米国のリーダーは自分のグループが発展しつつあることを強調していたが、それは発展(development)を重視する米国の文化が反映されているのかもしれない。一方で、「ただ会が存在するだけでいいではないか」という現状維持を肯定する言葉を、私は日本のリーダーから何度も聞いているのである。

他国や異文化を含めた社会福祉研究の場合、対象になる国や文化を「進んだもの」と考え、そこから学び、その一部を取り入れていく発想が多かったと思う。一方で、文化の差異を利用して問題意識に内在された自文化固有の視点や発想を抽出する研究も可能ではないか。前者を「加算の比較研究」とすれば、後者は「減算の比較研究」とでも呼ぼうか。問題解決に向かう研究として、異文化から学び、新しい方法や発想を付け加えるのではなく、文化の差異を視点のくずれとして用いながら従来の発想や思い込みを捨てることを目指すのである。